青薔薇の奇跡

reira

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

――ごめんなさい。今は夢に、音楽に集中したいの。

――なら、僕は音楽に集中できるように全力でサポートするよ。だから、もし夢が叶ったら。その時は、もう一度告白してもいいかな？

これは、ある晴れた日の夜。幼馴染の友希那に告白するも振られた少年。天野（あまの）翼（つばさ）が、約束を胸に友希那の夢を全力で応援するお話。

※この作品は小鴉丸さんの作品

・「武士だけどお姫様」

・「いつも頑張るお前の傍に。いつも支えてくれる君と一緒に。」

・「俺と君を繋ぐ音」

と世界観を共有しております。

許可を下さった小鴉丸さん、ありがとうございます！

目次

特別編
6番目のアフターグロウ特別編 ―― 1
第1章～青薔薇の元に集いし者達～
一話 ―― 10
二話 ―― 16
三話 ―― 20
3．5話 ―― 27
四話 ―― 33
五話 ―― 36
六話 ―― 40

特別編
6番目のアフターグロウ特別編

「まったく、まさか潜入させられることになるとは…」
僕は天野翼。友希那やリサと幼馴染みの高校一年生。
で、今何やってるのかというと……

――友希那の制服を着て、夜に羽丘女子学園に潜入、ピアノの調律をしています。

……大半の人が、「は？」ってなったでしょう。変態、とも思われるかもしれません。
しかし、ちゃんと訳があるのです。
時は数時間前に遡ります――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊

今日は友希那の学校の登校日だった。のだが、、、
「友希那、どうしたんだその声！」
「ちょっと翼、どうしたの？」
「声が半音ズレてる！」
帰ってくるなり歌声が半音ズレていた。
原因を尋ねると、ひとつ心当たりがあるらしい。というのも……
「今日、学校のピアノで声合わせをしたのよ。きっと、それが原因ね」
「学校のピアノが合ってないんだな、、」
調律くらいちゃんとしろよ羽丘女子学園！
思わず頭を抱えた。
「……翼」
「どうした？」

「学校のピアノ、調律してくれないかしら」
……え？
突然の依頼に、思わず目をぱちくり。
だって、色々と問題がある。
「つまり、羽丘女子学園に行って学校のピアノ調律してこい、と？」
「ええ、そうよ」
「……男の僕に、羽丘女子学園にいってこいと？」
「ええ、そうよ」
……門前払いな気がするんだけど。
「もちろん、そのまんまいかせるわけにもいかないわ。そんなことしたらすぐに捕まるでしょ？」
「え、ならどうするの？」
「…そ……わ…せ……く……て……けば」
「……なんて？」
なんか急に小声で話し始める友希那。顔が赤いところをみると、恥ずかしがっているのだろうか。
「えっと、だから、その、つまり
……わ、私の制服着て、女装するのよ。これで、中に入っても大丈夫よ」
「え？けどそれって、、」
「まさか、匂い嗅ぐような変態じゃないわよね？その辺は信用してるんだから」
……まぁ、そんなことするような奴に自分の着ていた制服なんて渡さない。考えてみれば当たり前だ。
「それに…あのピアノには今までお世話になったし、これからもお世話になるから。学校で練習する時、良く使ってるのよ」
「うーん……確かに、ずれたままだと困るね。わかった、やってみる。」
そういった事情があるなら、断るわけにもいかない。
「じゃあ、頼んだわよ。翼」
「うん、わかった」
というわけで、友希那の制服を借りて、バレないようにヘアピン等

でおめかし。
もともとヘアスタイルがショートヘアで、茶髪なので、割とかんたんにそれっぽくできた。
声も、女性が出す声色に合わせておく。
ちなみに、それを見た友希那は
「……翼ちゃん」
「はーい☆」キュピッ
「……あなたの頭の中の女の子ってアイドルしかいないのかしら」
仕方ないじゃん！
友希那やＲｏｓｅｌｉａ、バイトの先輩くらいしか女の子出会わないから、アイドルくらいしかみてないもの！
……ともかく、翼くん改め翼ちゃんは放課後の羽丘学園に忍びこんだのであった！

＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ピアノを直して、あとは脱出するだけだったんだけど。
「…駄目だ、昇降口にはすでに鍵がかかってる」
はい、詰んだ！
さて、ここからどう脱出しようか悩んでいると、なにやら人の気配が。
「ねぇ、君どうかしたの？もしかして、迷子？」
そんな声がかかったので、後ろを振り返ると黒いセーラー服を来た黒髪ツインテールの女の子がいた。
「はい、迷子です。というか、あなたはだれ？」
「……え？」
いや、突然口をあんぐり開けられても、、、
「私の事、みえてるんですか？」
「はい、見えてます」
「本当!?わーい！やったやった！」

なんかぴょんぴょん跳ねるくらい嬉しいらしい。
「ねぇねぇ、お話ししよ！」
「うん、してもいいけど、僕はここから出ないといけないんだ。だから、、」
「わかった！お姉ちゃんがここから出してあげるよ！ついてきて！その代わり、いっぱいお話しましょ！」
「わわっ!?」
女の子に手を引かれ、駆け出していく。

しかし、その先に灯りがみえた。つまり、だれかいる。

「ストップ、ストップ！」
「どうかしました？」
慌てて手を引引っ張って女の子を止める。
「実は、訳あって他の人に僕の姿を見られるわけにはいかないんだよ」
「なるほど。つまりあの娘たちに見つかるわけにはいかない、ということですね」
「そういうこと」
よくよくみると、たしかあれはアフターグロウというバンドの娘たちだ。
なんか、妙にビクビクしているのは怖いからだろうか。
……しかし、あの巴すら怖がるとは。意外な一面を垣間見たな。
って、そんな場合じゃない。彼女たちはこの学園の生徒。顔バレしたら即アウトだ。それに、巴にいたってはＲｏｓｅｌｉａでよく練習風景を撮影するあこの姉だから、僕の顔と名前を知っている可能性が高い。
「フフフ、それならお安い御用よ！」
「なにか、策があるんですか？」
「もちろん、イタズラするのよ！私、訳あって普通の人には姿がみえないから！」
「えっ!?」

一体、何をするのだろう。何故か、不安になった、、

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊

なにやら、階段でもめている。どうやら、階段の数を数えるらしい。怖いのに、なぜわざわざそんなことをするのかは僕にはわからなかった。

ちなみに、お姉ちゃん(他に呼び名が思いつかなかった)はアフターグロウのすぐ横にいる。というのに、誰も気がつく様子はない。

「フフフ。さぁて、イタズラ開始よ！」

アフターグロウの人たちは階段を数えている。

そして、階段を数え終わったあと…

お姉ちゃんが、「13！」と、巴の声で叫ぶ。

なぜ怖いのかよくわからないが、効果は抜群だったようで、みんな怖がっている節があった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊

「へぇ、意外！友希那ちゃんと知り合いなんだ！」

「お姉ちゃんも、友希那のこと知ってるの？」

「もちろんよ！いつも、歌の練習ばかりしていてね。すごく頑張ってるわ。ただ、ここ最近すこし喉の調子が悪い気がするわ」

「……また、大根はちみつのど飴つくってあげようかな」

途中、お姉ちゃんの要望どおりお話をした。

(名前を聞いても答えられないようだったので、なんて呼べばいいのか聞いたら『お姉ちゃんって呼んで！』っていわれたので、お姉ちゃんと表記する)

何故バレてはいけないのかということ、僕は本当は男で女装していること。ピアノを調律したこと。そして、友希那のこと。

お姉ちゃんはどの話しも親身になってきいてくれて、決して僕のことを笑ったり罵ったりはしなかった。
ちなみに、いまはバレないように先程調律したピアノのある部屋に隠れていた。ゆっくりはなすならここがいい。と、お姉ちゃんに言われたからだ。
と、考えていた時だった。
突然、歌声が聞こえて来た。
『くらくら～いあうと♪くらくら～いあうと♪』
これは、確か彼女達の持ち歌だったな。
『不器用でも足掻いて進んで♪』
ちょくちょくハワイロールってネタにされるが……
『一ミリも無駄なんてない足跡残すから♪』
いい曲だよなぁ……
『そうさ♪』

「フフフ、歌には音楽よね！ピアノを奏でましょう！」
「え、この曲しってるの？」
「もちろんよ！この曲、あの子たちがこの学校でよく練習してるもの！」

お姉ちゃんが引くピアノは、とても上手だった。ピアノの腕なら、燐子にも引けを取らないのではなかろうか。
しかも、短調にアレンジされている。暗くて怖い感覚が夜という周囲の状況と相まって……とても、良い音だ。
「あれ？ピアノの音、直ってる？」
「僕がさっき言ったじゃん。僕がそのピアノ直したの」
「そ、そうなんだ、、、」
なんて、話していると、外からアフターグロウの人たちの悲鳴が上がる。
それを聞いた少女はクスクスと笑っていた
「面白いわね、あの子達の反応！あそこまでイタズラしがいのある子

達ははじめてだわ！それに、私の事が見える子も始めて！なんだか、今日はとっても面白い日だわ！」
「……ねぇ、お姉ちゃん。ちゃんと脱出できる？」
「……ええ、大丈夫よ！お姉ちゃんに任せなさい！」
なんだろうか、この不安は。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

灯りを探したには、二人しかいなかった。そのうち一人は見かけたことがある。たしか、喫茶店の女の子だ。
「……あれ？」
やべっ!?目があった！
慌てて、物陰に隠れる
「どうかしたの？」
「つぐー、この鏡の前立ってくれる？」
「モカちゃん？一体、何を、、、」
「……今、つぐがこの前を通り過ぎたとき、明らかに鏡につぐじゃない人が鏡に写ってたんだよね」
「えっ!?モカちゃん、それ冗談だよね？」
女の子が振り返ったタイミングで、突然背中をどんって押された。
ふと先程いた場所をみると、お姉ちゃんがクスクスと笑いながらそこにいた。
「あっ！また写った！」
げっ！見られてる！
慌てて、また物陰に隠れた。今度は押すような真似をしない。

「……！」
「つぐが振り向いた瞬間、また……」
「いやあーーーー!!!!」

この悲鳴に、お姉ちゃんは腹を抱えてのたうち回っていた。
「アハハハハハハ！面白い、面白いわ！なによ、あの悲鳴！傑作だわ！」
「ちょっと、罪悪感が、、、」
「でも、この悲鳴は翼くんがいないと聞けなかったわね。ありがとう、翼くん。おかげで、今日は最高の夜になったわ！」
「う、うん。どういたしまして、、、」
あれ、僕名乗ったっけ？
「ここまでしてくれたんだもん。ちゃんと責任持って貴方をここから出してあげるわ！」
「わわっ!?」
そのまま、僕はお姉ちゃんに手をとられそのまま駆け出していく。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

体育館。
まだ、誰もいない。僕とお姉ちゃんの二人っきりだ。
「今日は、最高に楽しかったわ！でも、もうおしまい。フィナーレよ」
「僕の方こそ、ありがとうございました。おかげで、僕もなんだかんだで楽しめました！」
「それはよかった。でも、もうお別れよ」
誰かがやってきた。アフターグロウの人たちだ。
すると、突然お姉ちゃんは駆け出して、アフターグロウの人たちのもつ懐中をいじりだした。そして……
「うわっ!?」
懐中電灯が、壊れた。あたりは暗闇に包まれる。
「大丈夫、すこし接触を悪くしただけだよ。すぐに直るから」
ふと、耳元でお姉ちゃんの声がした。そして、また突然手をとられ、僕とお姉ちゃんは駆け出していく。
そのまま、お姉ちゃんの声が前から聞こえてきた。

「何度も言うけど、今日は本当に楽しかったわ。あなたやあの子達のおかげよ」
――僕も、楽しかった。
そう言おうとしたが、何故か声が出ない。
「あの子達は、私が後で責任を持って外にだすから、あなたは先に帰っててね。私のピアノも直ったし、色んなイタズラもできたし、私は満足。正直、外に出すだけなんてお礼として足りないと思ってるくらいよ。
だから、これが、本当に最後」
風を感じる。が、視界は真っ暗なままだ。
お姉ちゃんが、手を離したのだろう。握られていた感触がいつの間にかなくなっていた。
視界が真っ暗な僕はその場に立ち止まるしかない。
――いや、気配は感じるが、体をピクリとも動かせない。
『金縛り』という単語に、行き着いたその時だった。

突然、頬に柔らかい感触がした。
そして、耳元からお姉ちゃんの声が聞こえる。

「翼くん。私を楽しませてくれて。そして、私のピアノを直してくれて。どうもありがとう。そして、さようなら」

お姉ちゃんが言い終えると同時に視界が開ける。
……ここは、羽丘女子学園の校門のようだ。

今日は満月。月の光が辺りを照らしている。

僕は、もはや聞き慣れたアフターグロウの人たちの悲鳴を背に、一人こっそりと友希那の家へと帰るのだった。

第1章～青薔薇の元に集いし者達～

一話

青い薔薇、、それは、存在すら叶わぬ物。故に、花言葉は『不可能』と言われる。

神話におけるクローリスとニンフの物語は知っているだろうか？

花の女神クローリスは愛するニンフが死んだ時、そのニンフを花の女王と言われる花に変えてくださいと、オリンポスの神々に頼んだ。

その願いが聞き入れられ、ニンフは薔薇となった。

その時、クローリス自身が薔薇に色を付けたが『青は冷たく、死を意味する』として、薔薇に青い色をつけなかった。

だから、この世に青い薔薇は存在しないのだ。

しかし、それはもう昔の話となった。

品種改良により、青い薔薇が生まれ、広く普及した。

花言葉も、『不可能』から、『夢が叶う』に変わった。

――夢。それは、人の欲望の権化。

金、怨み、恋、権利、名声……

それが努力もなく叶うとしたら、一体どれほどの惨事になるかは想像におまかせする。

ただ、少なくとも理想的な人格者でもない限りは己の欲望のままに夢を叶え、多くの者が死ぬであろうことは想像に難く無いはずだ。

そもそも、努力も無く望むままに夢を叶えるのは『奇跡の力』でしか無いのだ。

それは、あらゆる道理や権力をねじ曲げ無理やり叶える『奇跡の力』。

ねじ曲げた結果、歪みを生み出し多くの人を苦しめる『奇跡の力』。

……それでもなお、人々を誘惑し、争いを起こす種となり人々に『死』を撒き散らす『奇跡の力』。

それが、夢を叶える『奇跡の力』。
…お気づきだろうか？
結局、『夢が叶う』という花言葉が意味するのは『奇跡』であり、それ即ち『死』なのだ。
そして今日も、『死を意味する』青い薔薇が咲き誇る…

「終わったー！」
季節は春。今年入ったばかりの春明高校での授業がおわって挨拶をして迎えた放課後。
僕、天野（あまの）翼（つばさ）は荷物を持って階段をかけおり、誰よりもいち早く学校の外へ。はしゃぎすぎだ。と、思う人もいるだろうが、それだけ今日は特別な日なのだ。
…いや、今日も特別な日だ。という表現のほうが正しい。というのも
「友希那のバンドメンバー探し、中々思ったよりも楽しいなぁ。さて、もう準備は万端だけど、、、」
この間、幼馴染の友希那がバンドのメンバーをさがしてライブハウスをうろうろしていたところに遭遇。事情をきいた僕はバンドメンバー探しに協力することにした。
まぁ、既に二人ほど自分の中では確定している。
僕から紹介するのも考えた。が、しかし、それでは友希那の目標の妨げになると思ったのでやめておいた。
ＦＵＴＵＲＥ　ＷＯＲＬＤ　ＦＥＳ…
プロですら落選が当たり前、このジャンルでは頂点とも言われる大きなイベントである。
それが、友希那の目指す夢であり、目標なのだ。
そのためにはそれ相応の努力が必要となる。遊びで入るようなら頭ごなしに断られるだろう。だから、そのやる気と意思を本人が見せ

る必要がある。
僕から紹介するのはあまり良くないだろう。
…まぁ、誘導はしておいた。その辺りは問題ないはず。
あと、知り合いのツテで、あるバンドを友希那と同じライブハウスに出演させた。僕の予想通りなら、そこから一人スカウトができるだろう。
……場は、僕の出来る限り、整えた。
あと一人、本人のやる気次第だ、、、

……
……

ライブハウスに向かう途中、リサと友希那がライブハウスの方に歩いているところを見つけた。
「やほー！リサ、友希那！」
「あ、翼じゃん。久しぶりー！」「翼、久しぶりね」
手を振りつつ二人の名前を呼びながら駆け寄る。
昔はこの三人でよく遊んでたものだ。
……まぁ、友希那はこないだライブハウスであったし、リサともアクセサリーショップであったんだけど。
「うん、二人とも久しぶり。えっと、もしかして二人ともライブハウスに？」
「ううん、私はアクセサリーショップにいくんだ」
あ、そういやあそこのライブハウスの手前に新しいアクセサリーショップができてたっけ。今度見に行ってみようかな。
「……翼、こないだ頼んだ件なんだけど」
「バンドのメンバーだよね。ごめん、まだ見つかってなくてさ」
わかりきってるだろうけど、嘘だ。
見つかってるし、既に準備は整えてる。あとは本人の意思の問題だ。
「友希那、まだ探してたの？」

「当然よ、今年こそは見つけるわ。最低メンバーは三人。今度こそＦＵＴＵＲＥ　ＷＯＲＬＤ　ＦＥＳにでて自分の音楽を認めさせる」
「そういや、去年も探したなぁ。まぁ、去年は条件あわなくて見つからなかったけど」
　でも、今年首尾よく見つけられたのは去年の挫折があったからでもあると思っている。決して去年の時間は無駄ではない。
「ん？去年は？」
「今年はまだ始めたばかりだからわかんないでしょ？大丈夫、今年こそは見つかるって。僕、出来る限り手伝うから」
「…ありがとう」
　探すという名目でいろんなバンドが見れるし、案外楽しいんだよメンバー探し。
「こんなところで立ち止まって話してる場合じゃなかったわね」
　そう言って、スタスタと歩いていく友希那。
「うん」「ねぇ、翼。ちょっとまって」
　友希那の背を追いかけようとしたら、突然リサの右手に僕の左手をとられる。突然のことに、何事かと思った。しかし、程なくして左手から伝わるリサの右手の感触から初めてリサが苦しんでいることに気がついた。
　リサの右手は、震えていたのだ。
「……友希那のバンドのメンバー探し、するの？」
「うん」
　どうして、彼女がこれだけ苦しんでいるのか。正直わからなかった。でも、続く言葉でやっとわかった。
「……友希那のお父さんの話…知ってるよね？」
「うん。それで友希那のお父さんが苦しんでたことも知ってる」
「なら、、なんで、メンバー探しに協力するの？友希那まで音楽に苦しんでもいいの？」
「……」
　リサは、友希那のことが心配なんだ。音楽で苦しんで欲しくない。だから、リサは友希那に協力できない。

「ねぇ、まだ今からでも遅くはないよ。友希那のメンバー探し協力するのはやめ「メンバー探し、僕は全力で応援する」なんで！」
「ちょっ！イタイイタイ！」
　リサが思いっきり左手を握ってきた。左手に刺さるような痛みがある。恐らくネイルだろう。繋がった手から血がたれている。思ったよりも深く刺さったらしい。
「ご、ごめん！でも、どうしてそんなこと言うの？」
　申し訳なさそうにリサが右手を離したことで、血まみれの左手が解放される。
「そりゃあ、友希那に笑ってほしいから。今は友希那は一人なんだ。だから笑えない。けど、バンドは一人ではできない。だから、きっとバンドができたら友希那はきっと、、、」
「翼、、」
　リサの目をみて、ハッキリと述べる。
　リサはハッと気がつくような素振りをみせるものの、まだ、どこかに迷いがあるようだった。
　……言っておくしかないか。
「ちなみに、もうメンバーは見つけてる。彼らには友希那のいくライブハウスに行くようにしたから、、後は友希那や本人達がどう判断するかだ」
「……ええ!?」
　驚くリサをよそに手元の腕時計をみる。
　――もう、友希那の出番だ。おそらく、ここから走ったとしても間に合わない。
「友希那の出番、過ぎちゃったな、、」
「メンバー決まってるって!?それで、ライブハウスに向かったってことは友希那はもう会ってる!?結局、誰!?誰なの!?」
「リサ、落ち着いてよ。結局は、彼らのやる気しだいなんだから。まだやるって決まったわけじゃないし。」
　何故かすごく興奮しているリサをなんとかなだめようとする。
　まだ彼らを見繕い、きっかけを作っただけに過ぎない。だから、ま

だ定かではないのだ。
「でも――「と～に～か～く！」」
リサの言葉を遮るように大声で言う。
そして、まだなにか言おうとしているリサの右手を血まみれの左手でそっと握って、そのまま歩き出す。
「わわっ!?どこいくの!?」
「決まってるでしょ？
新しくできたアクセサリーショップ、一緒にいこ？」
……リサは、なにかをいおうと口を開けた。が、続く言葉を飲み込んで何かを考えるような素振りをみせる。
――ごめん、今はまだいえないんだ。それは、君が友希那のバンドメンバーの五人目だから。君自身の意思で入ってほしいから。
声を大にしていえないこの思いを、リサならきっと、察してくれると思った。
「……うん、わかった。じゃあ一緒にアクセサリーショップに行こ？」
「あぁ、行こう！」
二人は、そのまま歩き出す。手が血まみれであること、手を繋いだままであることは既に忘れていた。
アクセサリーショップに入ろうとした時になってやっと気がつき、お互い照れながら謝る。
――その時みたリサの頬が赤く染まっていたのは夕焼けのせいだろう。

二話

リサｓｉｄｅ

あの時もそうだった。
私は、周りに合わせてしまう。考えて、自分の意見を押し込んで、周囲に合わせて行動する。
でも、それがすこし苦しく感じたりすることもある。
私は、周囲からいろんな悩みを聞かされる。内容は恋愛や部活など、多種多様だった。でも、かんがえても自分では答えられないときはよくある。
――私では、こたえられません。
いや、ダメ！そんなこと、私を期待してくれた人に言えない、、、
私は、悩む。
そうやって悩んでいると決まって翼が声をかけてくれる。
昔から翼は、私みたいにみんなの顔色を伺うのが得意だ。でも、私みたいにみんなと同化しているわけではなかった。色々な考えをつみかさねて、あらゆる可能性をかんがえて一緒に考えてくれる。
そんな翼は、わたしにはキラキラと輝いて見える。
……とても、かっこいい。
翼のお陰で、私は他の人の悩みをどんどん解決していった。そうしているうちに私は頼られる存在になった。
けど、私は翼に頼ってしまっている。翼と一緒に解決方法を考えるのはとても楽しくて、面白くて、、、
いつのまにか、翼のことがもっと知りたいとおもっている私がいた。

翼ｓｉｄｅ

アクセサリーショップを見て回った。確かに新しくできただけあって色々なアクセサリーがあり、品揃えも良かった。気になるアクセサリーだってあった。が、買えなかった。
こないだ、高い買い物をしたから。もう今月はお金がないのだ。
しばらく見て回った後、『このあと用事がある』といってリサと分かれてライヴハウス……の隣のカフェへとむかった。

＊カフェテリア＊

カバンからパピヨンマスクを取り出して装着する。このマスクで、アイツは僕を判別するため、装着せざるを得ない。
背中につけたマントも同様だ。ちなみに、高い出費の3分の1程度はこれにあたる。
問題は、一緒に連れてくるようにいったもう一人の方だ、、、
ちょっとした知り合いのため、この姿を見た彼女には恐らく冷ややかな目をされる。しかし、仕方のないことだ。バンドメンバーを増やすために、さけては通れないだろう、、、
視界の隅に彼女達を見つけた俺は、声高らかな笑い声を上げながら近づいていった。

燐子side

あこちゃんに手を引かれて初めて入ったライヴハウス。私とあこちゃんは、一緒に友希那さんの声を、、、歌声を聞いた。
言葉一つ一つが情景を生み出し、そこにはないはずの味や香りを生み出していく、、、
あんな歌声を、私はここで初めて聞いた。
「いやー、やっぱ友希那さんカッコいい……！」
「うん……すごく……カッコよかった……！」
あこちゃんと一緒に、束の間の余韻を楽しんでいた、その時だった。

ハーッハッハッハッ！

謎の高笑いがカフェに響き渡る。

――でも、どこかで聞いたようなことがあるような気がする。

「あっ、この高笑い、、、ま、まさか!?」

あれ、あこちゃんも知ってる人？

慌てて、高笑いの主の方を見る。

その主は、私がよく知ってる人だった。よく、家にある本を借りに来て、数日後に読み終わったら感想とともに本を返却してくれる。

感想もよくまとめられていて、どこにどう感動したのかわかりやすいので、感想を楽しみに貸していることも多い。

――そんな人が高笑いをしつつ、変わった仮面をつけてマントを羽織り、カッコつけてこちらに歩み寄っていた。

あの仮面は、パピヨンマスク、、、？

それに、黒のシルクハットに黒いマント…

なんだかあの格好、まるで怪盗みたい。。。

呆気に取られていると、その人は私達のテーブルのすぐ横に立つ。そして、まるで役者のようにカッコつけて話し始める。

「やぁ、黒薔薇姫よ。カッコいいもの探しの調子はどうだい？」

「フフフ、我が終焉の招きに会い……えっとこう、素晴らしい感動的な何かが、、、」

「黒薔薇姫よ、無理にカッコつけなくていい。だが、無事に見つけたようだな。カッコ良い物を。」

「う、うん！お陰様で見つかりました！ありがとう、パピヨン！」

――パピヨン!?

気がつけば、ガタッと派手に椅子から立ち上がっていた。

ここ最近突然現れて、クエストを手伝ってくれる謎の存在、、、

お陰で、私達の装備は一新され、より強力なものになっていたが、その影にはパピヨンという名のキャラがあった。たしかに、パピヨンは怪盗のキャラで、装備の見た目もこんな感じだった。

その、パピヨンのプレイヤーが、まさか、、、

――翼さん？

三話

燐子ｓｉｄｅ

私がポカンとしている間に、二人は話を続ける。
「黒薔薇姫よ！ただカッコいいものを見ているだけでいいのか！」
「そ、それは、、、」
「その思い、本人に直接伝えたくはないか？」
「つ、伝えたい！」
スポ魂漫画のような、強い口調で訴えかけるパピヨンこと翼さん。
「ならば！伝えるが良い！ライブハウスの出入り口で待てば、必ず現れるであろう！では、さらば！」
「あっ……」
私は、カッコつけて走り去る翼さんを、ポカンとした目で見ることしかできなかった、、、

その後、あこちゃんと一緒にライブハウスの入り口で張り込む。
すると、友希那さんともう一人……紗夜さんが一緒に出てきた。
二人はバンドを組むメンバーを探していた。
そのことを知ったあこちゃんは、憧れの友希那さんとドラムが組みたいと言ったものの、すぐに断られてしまった、、、

あこｓｉｄｅ

お願いは、頭ごなしに断られてしまった。
……正直、悔しい。だから、もう一回。日を改めて、お願いを。

このことを、りんりんに話そう。とも思ったけど。それは、やめておいた。
何だか戸惑っているように見えた。というのもあるけど……
もし、続けて友希那さんにお願いしに行こうとしたら。
りんりんは「迷惑だから」といって、止めるだろうと思ったからだ。
と、なると相談できるのは、、、あ、そうだ。パピヨンに相談してみよっ！
すぐにパピヨンに連絡をとった。

『パピヨン、、、私、直接友希那さんに会えたよ』
『そうか。それは良かったな』
うーん、もうちょい興味持ってほしいな。
『でね、そこで聞いたんだけどさ。友希那さん、バンドメンバーを探してるみたいなの！』
『ほう。……たしか、黒薔薇姫はドラムが叩けたな』
お、食いついたかな？まー、そりゃそうだよ！友希那さんがバンドメンバーさがしてるなんていくらパピヨンでも知らないよね！
『うん！それで、友希那さんに直接お願いしたんだけど、、、断られちゃって』
なかなか返答が返ってこなかった。十分たっても返答が返ってこなかったので、おーいと送ろうとしたところで、ずっと待っていた返答が返ってきた。
…けど、その返答に驚いた。

『――だからといって、諦める気か？』

『……え？』
『私からしたら、それはチャンスだろう。紛れもなく、黒薔薇姫のためのチャンスだ。ここで、もし黒薔薇姫以外のドラマーが選ばれたら、、、黒薔薇姫は悲しいだろう？それに、憧れの友希那さんと一緒にバンドがしたいのではないか？』

『うん…私、友希那さんと一緒にバンドがしたい。パピヨン、どうすればいいかな？』
　私には、それがわからなかった。もちろんバンドがしたいし、憧れの友希那さんと一緒にいられるし、何より友希那さんの力になりたい。
『なに、諦めなければ必ず転機は訪れる。ただ、ドラムを叩く努力は怠るなよ、黒薔薇姫。』
『えーと、つまり、、、？』
『つまりだな、諦めずに直接会ってまたお願いをするのだよ。ただ、もし。ダメだったとしても、毎日ドラムの練習は怠るな！友希那に見合う実力をつけろ！』
　そ、そっか！あこの実力を友希那さんに見合うくらいにしないと、友希那さんの足引っ張っちゃう！
『な、なるほど、、、！たしかに、バンド組めたとしても、友希那さんの足引っ張るの嫌だもん！私、頑張るよ！パピヨン！』
『……ふっ。そういうと思って、だな。実はそちらに練習用の譜面を幾つか送ってある。
　――妥協はするなよ。あとは黒薔薇姫の努力次第だ。』
『うんっ！よーし。あこ、頑張るぞー!!』
『あぁ、頑張れよ』
　うーんと、そのために何をしようかな…
「さてと、まずはドラムを出そう。えっと、どこにあったかな、、、お姉ちゃんなら、しってるかも！」
　ドラムのことを聞くためにお姉ちゃんを探す。が、お姉ちゃんの部屋にはいなかった。
　お姉ちゃん、既に家に帰ってきてたから、家のどこかにはいるはず。家中を探し回ってみると、お姉ちゃんは玄関にいた。
「お姉ちゃん、どうしたの？」
「あぁ、あこ。実は、怪しい封筒がウチのポストに入っててな」
「ん？どれどれ？」
「これなんだけどさ……」

そういって、お姉ちゃんが差し出したのは、黒に薔薇の模様が描かれたすごくカッコいい封筒だった。
裏返してみてみると、そこに、白い文字で『Ｔｏ　ｔｈｅ　ｐｒｉｎｃｅｓｓ　ｏｆ　ｂｌａｃｋ　ｒｏｓｅｓ.』と書かれていた。
「お姉ちゃん、この英語なんて読むの？」
「んーと、『黒い薔薇のお姫様へ』って意味じゃないかな。黒い薔薇のお姫様なんて、家にはいないんだけど」
黒い薔薇のお姫様…黒薔薇姫？
「……あ、それ多分あこのことだよ。開けてもいい？」
「えっ」
ぽかんとしているお姉ちゃんから封筒をとる。
あけると、お姉ちゃんが使っているようなドラムの楽譜が色々入っていた。
「これ、譜面(スコア)か？しかし、ぱっと見た感じだけど、相当難かしそうだな」
「……お姉ちゃん、私、頑張って練習してくる！」
「えっ、あこ!?」

憧れの友希那さんとバンドをするために。
あこ、頑張るよ！

「とは言っても、あこ、楽譜読めないんだよね、、、
りんりんに、いつものお願いしよー」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
それから数日後
＊＊＊＊＊

頭ごなしに断られるのが二回も続いた、、、
それでも、ドラムの練習はひたすら完璧になるように頑張っている。友希那さんに迷惑かけたくないもん！
送られたときには新品だった譜面(スコア)も、もうどれだけ使い込んだの

かってくらいボロボロになっちゃった。でも、それでも友希那さんと共にバンドをするには届かないのだろう。
もっと、もっとだ！
友希那さんに追いつくため、そして友希那さんの役に立ちたいから。私はひたすら、練習に練習を重ねていた。

不意に、携帯の着信が入る。

「あれっ、えーと、、、りんりん!?」
りんりんからだった。気がつけば、もう、夜も遅い。
こんな時間にりんりんが連絡をいれるのは珍しいなぁ。
『もしもし、りんりん？どうしたの？』
『え、あの……最近、見かけないから、心配で…』
『あ、そういえばログインしてなかった!!』
すっかり忘れてた。。。
うぅ、まぁでもしかたない。これも友希那さんとバンドするため！
『そういえば、パピヨンから聞いたよ。あこちゃん、友希那さんとバンドするために、すごく練習してるって』
『うん！だけど、全然認めてもらえなくて、、』
『うーん…言葉だけじゃ、ダメなのかもね』
『じゃあ、どうしたらいいんだろ？』
『あこちゃんや私が、友希那さんを好きになったみたいに、、音で伝えたら、いいんじゃないかな？』
音、で、、？
『友希那さんの歌声を聞いたとき、すごく感動した。でも、その感動って、なかなか言葉にはしづらいよね。きっと、バンドってそういうものなんだよ。』
「……な、なるほど。なんか、わかった……かも！」
それにしても、りんりん本当に打つの早いなぁ
「明日……また、やってみよう」
りんりんとのチャットを閉じてため息をつく。すると、ガチャっと

玄関が開く音がした。
「お、ただいまー……って、あこ」
「あ、お姉ちゃん、おかえりー！」
お姉ちゃんが、帰ってきたみたいだ。
「その顔、今日も不発だったみたいだな。『あこだけのカッコイイ人とバンドやる作戦』は」
「うん、そうなんだ。特に、ギターの紗夜……さんがすっごい防御力なんだけど、認めてもらえるまで頑張るんだ！」
「お、そうかそうか。頑張れよ」
わ、お姉ちゃんが頭なでてくれた！
……お姉ちゃんの手。あったかくて大きくて、気持ちいいなぁ
「……ん？紗夜さん？もしかして、湊さんとバンド組んだっていう紗夜さんのことか？」
「え、お姉ちゃん知り合いなの!?」
「紗夜さんじゃなくて、湊さんの方だけどな。湊さんはウチの学校の高等部だからよく校内ですれ違うよ。
あこのカッコイイ人って、湊さんか」
「そうなの！ライブで見たときにビビビッてきてね！すごくカッコイイんだ！」
あぁ、思い出しただけで鳥肌が立つよ！
……これが、音の力なのかな？
もし、私が鳥肌の立つような音を出せたら友希那さんにも認めてもらえるかも！
「湊さん、なぁ。手強いだろうけど応援してるよ。
そういえば、知ってるか？湊さんはウチのダンス部のリサさんの親友だ」
「……ええーーっ!!!」
リサ姉は、私が所属するダンス部の先輩。すごく気が利く人で、あこもよくお世話になる。
そんなリサ姉はよく親友の話をしていたけど、、、
まさか、その親友が友希那さんだ。なんて、夢にも思わなかった。

「……よし！友希那さんとバンド組むためにも、練習頑張るぞー！」

その夜、ひたすら練習した。

次の日に友希那さんに会って、バンドにいれてもらうために。

――あこの本気を、音で伝えるために。

3．5話

翼side

携帯ゲームにて。あこにメッセージを送ったあとのことのことだった。

なんの前触れもなく、父さんから連絡が来た。

『今日からしばらく家かえれなさそうだ。いつも通り湊さんにお世話になっとけ』

「またかよ…」

友希那からの反応を待っていると、おもったより早く返信が帰ってきた。

『どうかしたの？』

『急で悪い、父さん用事入ったみたいでさ。また泊まらせてもらえないか？』

『…ええ、大丈夫よ。どうせ、母さん達にも許可はとってるんでしょ？』

『ま、父さんだからな』

『とりあえず、邪魔しなければいいわよ』

さて、なぜこんなにもスムーズにいくのかというと、親の事情と言うものだ。

家の親は湊家と親しい。昔、いろいろあったらしく燐子とも幼い頃から親交は深い。

それで、泊まったり泊まりに来たりは本当によくある。というかほぼ強制。

家の鍵を牛耳っているのは父さんだから、仕事から家に戻らないと家に入れないのだ。んで、その場合は大抵既に湊さんのところに許可をとってあることがおおい。なので、泊まってこいと父さんが言ったら泊まる他ないのだ。

……僕、理不尽すぎだろ

まぁ、幼い頃からそんな感じなもんだから、僕からしてみたら友希那は幼馴染みたいなポジションである。

というか幼馴染そのものである。

ちなみに、リサは友希那の家の隣だ。

まぁ、そういう事情なので友希那の家に向かうことにした。

……あ、そうだ。友希那が帰ってるってことはあこももう帰ってるはずだ。

フフフ…頑張ってくれるであろうあこにはカッコイイ感じにして練習用の譜面(スコア)を送ってやろう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊

途中、あこの家に寄って、ポストにカッコよく包装した譜面(スコア)を投函した。

あこ、喜んでくれるといいなぁ。

ん？なぜあこの家を知ってるかって？

こないだ、燐子の家に行った（主に本を借りるためである）ときにあこの家の住所を見たからだ。あとはグーグル先生におまかせっ！

……まぁ、そんなこんなであこの家ののポストに譜面(スコア)を投函して、友希那の家についた。

とりあえず、インターホンを押す。

ピンポーン

すると、友希那が出迎えてくれた。

いつもはおばさん（友希那のお母さんを僕はこうよんでいる）が真っ先に出てくるんだけどなぁ。

「……いらっしゃい」

「友希那、こんばんは。おばさんは？」

「……今、お風呂」
「なるほど。じゃ、お邪魔しまーす」
よく見たら、友希那も髪が湿気を帯びていた。友希那も風呂上がりなのだろう。
なんとなく顔が赤くなった気がしたので、ごまかすためにそそくさと上がっていく。怒られたくはないもの。
友希那の家に上がってからはいつもと何ら変わらない。
台所に立って、飯の準備中をする。
なぜかは知らないけど、僕が泊まりに来たときはいつも僕がご飯担当。ちなみに家でもご飯担当。
父さんは料理壊滅的だからね、、、
「さて、ささっと作るか」
とりあえず、適当に冷蔵庫の残り物と思われる野菜を炒めて、これまた冷蔵庫に中途半端に残っている焼肉のたれと合わせて野菜炒めの完成。
野菜の一部は取っておいてさらに細かく切り、味噌汁の具に。そこに大根も短冊切りにして入れる。お豆腐もあったのでそれもいれてお味噌汁完成。
ご飯も来る前に炊いていたのか、ちょうど炊飯器がご飯ができたことを告げる音を鳴らす。
……とりあえず、こんなもんでいいだろう。
「ご飯できたぞーー!」
「お、もうできたの!はやいわね!」
「ちょ、おばさんは風呂上がりなら服来てこい!」
「はーい」
いくら子供扱いだからといって風呂上がりのバスタオルまいたまま来られたら反応にこまるわ!
こっちからしたら他人なんだぞ!
その後、ご飯を机において三人（友希那、僕、おばさん）で席につく。ちなみにお父さんはお仕事だそうだ。
「「いただきます」」

「……ホント、翼のご飯は美味しいわね」
「よかった。基本的に、残り物だったからね。少し心配だったんだ。」
やはり、自分の作ったご飯が褒められるのは嬉しいものだ。
「……」ガツガツ
「おばさん、がっつきすぎ。むせても知らんぞ？」
おばさんはすごい勢いで食べる。昔、フードファイター的なことをしていたらしい。
「！」ケホケホ
「ほら、言わんこっちゃない」
「ゴクゴクゴク……ぷはぁー！生き返った！」
……子供みたいな反応だな！おい！
ちなみに、隣ではおばさんの子供の友希那がその光景をみて呆れていた。
うん、僕も呆れた。

その後。
風呂もささっと入った頃には夜も遅くなっていた。
そろそろ寝るかと思い、僕が寝る客室にむかっていた時。
僕が寝る客室の隣の友希那の部屋の電気が点いていた。
なにやら歌声も聞こえる。
……やっぱり、友希那の歌声ってすごい
「友希那、まだ起きてるのかー？」トントン
「おきてるわよ、どうかしたの？」
ドアをノックしてみると友希那の声が帰ってきた。
「練習してるのか？」
「ええ、そうよ」
「練習、見てもいいか？」
「……ええ、いいわよ」
ガチャ、と扉を開けて友希那の部屋へ。
ちなみに、友希那の部屋は白と黒が基本のシンプルな部屋だ。
「やっぱり、友希那の部屋ってシンプルだよなぁ」

「……悪い？」
「いや、それがやっぱり友希那だなぁって感じがして安心する」
急に友希那の部屋が女の子らしくなったら僕は友希那の事を本気で心配するだろう。
「それは、私が単純って言いたいの？」
「いや、そんな単純な部屋の本棚の一つが猫系の雑誌で埋まってるのが可愛いって言いたいの」
「……そう。それならよかったわ」
あ、なんでもないふりしてるけど、なんかちょっと照れてる。こういうところ可愛いよな。うん。
「…何考えてるのよ」
「え？いや、別になんでもないよ。友希那の可愛さを再確認しただけだよ、うん。」
「っ！また、そうやって、、、」
「？」
顔を赤くはしている。が、怒っているというわけでもなさそう。
「と、とにかくそろそろ自分の部屋に戻って頂戴」
「え、でも練習は」
「もう夜も遅いし、明日にするわ。だから自分の部屋に戻って」
「……わかった」
友希那の練習、みたかったな。
前みたいに、二人で特訓もしたかった。
……でも、友希那を夜遅くまで起こしているのも悪い。
渋々、僕は友希那の部屋を後にする。
「…また、今度」
「え？」
「また今度、練習みせて上げるから。まだ、しばらくはウチに泊まるんでしょ？」
「…うん！おやすみなさい、友希那！」
「ええ。おやすみ、翼」
そうして、僕は友希那の部屋をあとにした。

友希那side

「全く…一体、何を考えてるのかしら」
翼を追い出した後、部屋の電気をけしてベッドによこになってボソリとつぶやく。
どことなく、顔に熱を帯びているかのような感覚。
原因はわかっている。突然、部屋に来て可愛いなんて言われたら恥ずかしいに決まってる。
「あんなことといわれたら、練習に集中できないじゃない」
兎に角、今日はもう練習に集中できないだろう。
今日はもう寝て、切り替えたほうがいい。
「…切り替えられるかしら」
ちょっと不安になったところで、疲れていたのだろう。急に睡魔に襲われて記憶は途切れた。

――今度、ちゃんと練習を見せないと

四話

リサｓｉｄｅ

久ぶりに幼馴染に会った数日後。
放課後、友希那と一緒に帰ろうとしたときのことだった。
「え！友希那、今の話ってマジ!?」
「本当よ、紗夜って子と。まだ、ボーカルとギターだけだけど、、コンテストに向けて、新曲も出来上がってきてるわ」
「そっか……あはは。教えてくれないからびっくりしたじゃん」
そっか…友希那が、バンドを……
いつかこんな日が来るとは思ってたけど。
「友希那がついにバンドかぁ～。友希那、私といるとき以外いつも一人だからさ。結構心配してたんだよね」
「リサ……でも、私は本気だから。彼女とも、目的が一致したから組んだだけよ。それに、これは父さんの……」
あっ、そうだ。友希那はお父さんの為に、、、
「うん、大丈夫。わかってるよ。目的はおいといてさ……私、嬉しいんだ。友希那と一緒に練習してくれる仲間ができたってことだしさ。」
きっと、その紗夜って子とも仲いいんだろーなぁ
おもわず、ニッコリしてしまう。
「でもさ、どうする？たしか、コンテスト出るには三人以上が条件だったよね」
「……バンド組むこと、止めないの？」
……あちゃー、止めようとしてたの、バレちゃってたか。
「友希那は、私に止められたら止めるの？」
「……リサ」
なんとなく、テヘペロをしながら友希那に答えると、感動したような瞳で友希那が見つめてくる。
いや、そんなつもりじゃなかったんだけど。

その時だった。小柄の女の子が友希那のもとへやってきた。
「ゆ、友希那さん。お願いします！」
「ん？あれ、あこじゃん。どうしたの？」
「……リサ、知り合いなの？」
よく見たら、ダンス部の後輩だった。
「いいドラム叩きます！お願いします！」
「ちょっとちょっと？話見えないんだけど？えっと、あこドラムやってるんだっけ？友希那のバンドにいれてもらいたいの？」
「うん！それで何度もお願いしたけど、断られちゃって……
どうしたら、あこの本気が伝わるかなって考えて……それで……えっと……」
……すごいやる気だ。あこがここまでやる気になるの、部活でも見たことない。。。
「友希那さんの歌う曲、いっぱいいっぱい練習してきました！だから、、お願いです！一回だけ！一回だけでいいから！一緒に演奏させてください！それでだめだったら、諦めますから！」
「はぁ、何度もいうけど遊びじゃないの」
（あっ……）
友希那は、あこの頼みを遊びでやってるものと思ってるのか。
こんなに真剣なあこは、私だって初めてみるのに。
……こんなあこ、ほっとけない。
「まぁまぁ、友希那。いいじゃん、一回くらいやってあげなよ。ほら……」
「わわわっ!?」
「……？」
あこの手から、ボロボロの楽譜（スコア）をとる。
「この楽譜（スコア）さ。こんなボロボロになるくらい何度も練習してるってことでしょ？」
「……っ!?」
「ね、友希那。あことは同じ部活だからしってるけど、やるときはやる子だよ。」

「……はぁ。わかったわ。一回セッションするだけよ」
「本当、ですか！やったぁ！リサ姉、ありがとう！」
「良かったね、あこ！友希那、私もセッション見学していい？」
「別に、いいけど、、、どうしたの？急に。いつも、スタジオなんてこないのに」
「えっ……」
言われてから気がついた。どうして、友希那のバンドがこんなに気になるのだろう。
それから、私がベースをして四人でセッションをしたんだけど、、、
なぜか、勝手に指が動いてメロディになっていく。
私、しばらく引いてないのに、、、

五話

やはり、場を整えたらあっという間だった。
あこが加わって芋づる式に燐子も加わることで、Ｒｏｓｅｌｉａメンバーが結成された。
作戦は大成功、というわけだ。
しかし、父さんは一向に帰ってくる気配がないため友希那の家で長らくお世話になっている。
……それを、厄介な奴に見つかってしまった。
放課後、帰り道の途中でそいつに捕まった。
「おい、翼。テメェ、女と一緒にいただろ」
「げっ」
「げっ、ってなんだよ。説明するまで返さねぇからな」
龍斗。おなじ春高一年生で、ずっと好きだったエタハピのメンバーの一人。そして、何故かは知らないが妙に色濃い沙汰に目ざとい。
おそらく、彼の情報網に友希那と一緒に帰った（またはライブハウスにいった）ときの情報がかかったのだろう。春高に入ってから友希那のところにお世話になるのは今回が初めてだし。
「いま、家に親がいなくて。親が鍵持ってるから僕は別の下宿でお世話になってるの。
その娘は、多分その下宿先の娘さんだよ。」
「ほーう…年齢は？」
「え、年齢？一つ上だけど？」
龍斗のやつ、一体何が目的だ？
僕は、戸惑うしかなかった
「その娘の好き嫌いは？」
「そうだなぁ、ハチミツとか甘い物。それから猫が好きで、苦い物が嫌い。ゴーヤとか」
前にゴーヤを出したところ、大ブーイング。友希那が珍しくハッキリと拒否したので逆に印象的である。
「その娘の通ってる高校は？」

「羽丘……ねえ、これ何の質問？」
「いいから答えろ。その娘の誕生日及び星座は？」
「なにそれ…１０月２６日の蠍座だよ」
　本当に何の質問なのかわからないものの、とりあえず答えていく。
「その娘の趣味は？」
「うーん、特に思いつかないなぁ。あ、でも猫カフェよく行くね……ねえ、これで何が聞きたいのさ」
　そろそろイラついてきたころに、龍斗が答える。
「あぁ、このいくつかの質問にたいして、お前は考え込むことなしに答えてみせた。つまり、具体的な誰かがいるってことになる。その娘を思い描いてないとこたえられないからな」
「…うん？」
「俺、女と一緒に帰ってた。としか言ってねえぞ。つまり、思い当たる人は一人しかいないんだな？それに、そんだけしってるんだ。付き合ってるんだろ？」
「……」
　…くそっ！藪蛇だったか！
「ほら、もうネタ上がってんだ。好きなんだろ、その娘のこと」
「いや、昔から一緒で…ある意味兄弟みたいなものだよ。血のつながりはないけど」
「はぁ？」
　その時だった。突然携帯がなりだした。
「わり、ちょっと電話だ」
　ちょっと離れて携帯を取り出す。燐子からだ。
『はいもしもし』
『翼、いま予定空いてる？』
『うん、空いてるよ。どうかしたの？』
　横で龍斗がデートだとか騒いでるがスルーしておく
『いまから、Ｒｏｓｅｌｉａの練習があるの。是非、見に来てくれないかしら』
『え、いいのか？いくいく！場所は？』

『ＣｉＲＣＬＥよ……待ってるから』
『了解！』
いや、まさかＲｏｓｅｌｉａの練習がみれるなんて！
まぁ、いつも友希那の練習みてたけどさ。
高ぶる気持ちを抑えきれず、ダッシュでＣｉＲＣＬＥにむかう
「あっ！おい、どこへいく！」
「わりぃ！ちょっと用事ができた！」
「ちょっ、まてっ！」
慌てて龍斗が追いかけるものの、父さんによって常日頃から鍛えられている翼に追いつくことはできなかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
ＣｉＲＣＬＥ
＊＊＊＊＊

ＣｉＲＣＬＥにつくと、友希那やリサ、あこ、燐子、紗夜…Ｒｏｓｅｌｉａの面々が迎えてくれた。
リサや燐子は笑顔。
友希那は…顔は無表情だけど口元が緩んでいる。嬉しいのかな。もし『ゆきにゃん』だったら尻尾振って喜んでるだろうなぁ。
それから、あこは流石にもう、パピヨンだと気づいて…なさそう……あの反応は、初めて会う人にするやつだ。
それに拍車をかけてつっけんどんな紗夜。まあ、会ったのは初めてだしな。
「やっほー、友希那。久ぶり！それから、バンド練習見学呼んでくれてありがとう！」
「……べつに、みせたくて呼んだわけじゃないわ」
「それと、友希那。大丈夫、わかってるからさ。アレをしてほしいんでしょ？あの川でやったやつ」
「ええ、その通りよ。また、お願いできるかしら。今度は、ここにいるみんなに」

「了解。じゃあまずスタジオに入って一度いつも通りやって見せてよ」
「ええ。もとより、そのつもりよ」
友希那と僕が練習についてあれこれと言いあいながらスタジオへ入っていくのを革切りに、他のメンバーも続々とスタジオへ入っていく。

スタジオにつくと、みんなは位置について、それぞれの楽器を準備し始める。
その間、2つ並んでいるパイプ椅子の片方に自分の荷物を置く。そして、もう片方に腰掛けてその様子を見ていた。

元気でエネルギーにあふれるあこ。
引っ込み思案だがこれと決めたものを極める燐子。
真面目に努力を積み重ねてきた紗夜。
面倒見が良くて情の厚いリサ。
そして、芯が強くて純粋な友希那。

――絶対に、いいバンドになる。
なんとなく、そんな予感がした。

「では、始めるわ」
おっと、いつの間にか準備は終わっていたみたいだ。
「おう。最初は一通りよろしくな」
そうして、ＣｉＲＣＬＥのスタジオに美しい音色が響いた。

六話

ＣｉＲＣＬＥのスタジオでは、友希那たちＲｏｓｅｌｉａの練習が行われていた。

うん、素晴らしい曲だ。

いや、素晴らしいというより、綺麗と表現するほうが的確だろう。

バンドが結成されて一ヶ月も経っていないのにこの技術は素晴らしい。

注意深く聞いていたらあっと言う間に終わってしまった。

「…さて、感想を聞きたいのだけどいいかしら？」

「…あぁ、もちろん。そのために呼んだんだろ？」

「話が早くて助かるわ」

僕がするべきは感想……なのだが。

なんというか…細かいことを気にしてしまう。

「えっと、紗夜。サビの前でコードチェンジ遅れたのは自分でも気がついてる？」

「ええ、そうですね。少し油断しました」

「悪いけど、その前あたりからサビの入りまでもう一度引いてもらってもいい？」

「え、ええ。構いませんが…」

もう一度、紗夜さんにギターを引いてもらって僕は確信する。

ちょっとした違和感の一つ。その原因はこれだ。

「紗夜、すまん。ちょっとギター借りるぞ」

「え？一体何を」

紗夜のギターを手に取り、軽くネジをしめる。

…そう、紗夜のギターは音がズレていたのだ。だいたい、半音の半音程度。

「はい、突然すまんな。返す」

「…一体何ですか？」

「え、気がついていなかったか？紗夜さんの音ズレてた。だいたい、半音の半音くらい」

「え、そ、そんな……」
自分が気が付かなかったことが恥ずかしいのか、顔を赤くしたまま俯いてしまった。
…反応に困った僕は、同じようなミスをしているあこの方を向く。
「あと、おなじく楽器について。あこのドラム張り強すぎ。そのまんま使ってるとすぐにドラムがダメになるから、ほんのすこし緩めさせてもらうよ」
「そーなんだ！是非是非お願いします！」
あこのドラムの、張力を調整するネジをすこし緩める。
軽くスティックで叩くとより弾んだ音が出たことで、ここがドラムを叩くのにちょうどいい張力のポイントとわかる。
張力を調整したあこのドラムを本人に返すと、あこはサビの1フレーズをミスなく叩きはじめた。
どこか、とても楽しそうな表情で。
「すごい！いつもより弾んだ音が出る！」
「そりゃあ良かった。使ってる方に喜んでもらえると、調整したかいがある」
さて、ここまでは楽器の問題だ。
「紗夜、サビ直前のところでビブラート効かせることはできるか？」
「え、ええ。もちろんできるわ」
「じゃあ、ビブラートかけて半音上げてみて。それで、そこだけもっかいやってくれる？」
「…ええ、やってみましょう」
「他の人も合わせてくれ。サビ直前からサビの終わりまで。」
僕が頼むと、みんなは再び楽器を準備して合わせてくれる。
サビの直前。盛り上がりの前の静けさの中、ギターのビブラートが火種となり、そこからサビの一番の盛り上がりへと繋がる。
確実に、先程よりも盛り上がりがいい。
そしてサビが終わると、先程よりも手応えを感じたのだろう。
「…すごい」
「さっきよりいいね！」

「これは一体…」
「翼、やっる～！」
……なぜか感嘆の声とともに期待を込めた視線でこちらを見られる。たじろいでいると、友希那がパンパンと二回手を大きく叩いた。
「とにかく、紗夜はそこの部分を修正して。翼、他にはない？」
「そうだな、特にない。。。
あ、リサはもう少し練習したほうがいい。それから、燐子は目があったときに急に勢いなくなるから気をつけろ」
「はーい」
「……わかりました」
「それじゃあ、練習再開よ！みんな、準備して！」
それから、日が暮れるまで彼女達の練習に付き合った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

練習後、あこや燐子、紗夜たちと分かれて幼馴染三人で暗い夜道を歩いていた。
「それにしても、翼ってすごいね！指摘が友希那と同じかそれ以上に的確！」
「まぁ、慣れてるからな。それと、リサはもっと練習しておくこと」
「は～い」
こう言ってしまうと申し訳ないが、一番Ｒｏｓｅｌｉａで技術が足りていないのはリサだ。だが、面倒見の良い彼女は、それぞれのメンバーの支えにもなっている。
「……」
友希那は、何故か黙り込んでいる。何があったのだろう？
「友希那？どうかした？さっきからずっと黙り込んでるけど」
お、流石リサ。気が利くなぁ
「…いえ。ただ、今日リサは家の用事があるから早く帰らないと行け

ないんじゃないかと思っただけよ」
「あっ、ヤバ！そうだった！友希那、覚えていてくれてありがとう！そしてごめん！先帰るね！」
「あ、あぁ。じゃあ、またな。リサ」
「またね、リサ」
「うん！二人共、またね！」
…リサは足早に帰っていった。
帰り際に、リサが友希那に見えないように軽くウインクする。
やっぱり、リサも……
と、考えている内にリサの姿はもうなくなっていた。
「……」
「友希那、本当は違うんだろ？友希那がそんなことで悩むはずがない」
「……はぁ。本当、あなたには全部お見通しね」
「かもね。だって幼馴染だもの」
僕がドヤ顔で返すと、友希那はため息をつく。
何か不満でもあるのだろうか。
「別に不満なんてないわよ」
「なんで考えてることわかるんだよ」
「幼馴染だからよ」
……ドヤ顔で返された。
にしても、久しぶりだな。友希那とこんな軽いやり取りするの。
「で、どうかしたのか？なんでも、ズバっといってみなよ。別に怒ったりとかしないからさ」
「……そう。なら、正直に話すけど」
本題に切り替える。
友希那の口から、どんな言葉が出るのか。つい、ゴクリと唾を飲む。
そして、予想外の一言が飛び出す。
「――Ｒｏｓｅｌｉａのメンバー集めたの、翼でしょ」
「え？」
バレてないとおもったんだけどなぁ、、
「バレてないとおもった？」

「はぁ。全く、友希那には全部お見通しだな」
「……幼馴染だから」
頬をほんのりと赤く染めて、目線をそらしてそんなことをいう友希那に、不覚にもドキッとしてしまう。
同じ言葉でも、ドヤ顔で言われるのと照れ顔で言われるのとで全然違うのだと実感した。
「どうかしたの？」
「あ、いや、何でもない」
照れてる友希那に見惚れてた。なんて言えない。
それは『好意を寄せている』ということであり、友希那に迷惑をかけることになるからだ。
「そう、ならいいけど」
僕は、「おう」と軽く返しつつ。ふと、思い当たることがあって、周りの風景を眺めていた。
周囲は暗く、灯りはほんのりとともる外灯だけ。空は晴れており、チカチカと星がまたたいている。そんな夜空に、月の姿はない。
そんな夜の坂道を友希那と一緒に下っている。
――まるで
「まるで、二人で公園に行った夜みたいね」
「……覚えていてくれたんだ」
そう、去年の今頃。あの日、空は晴れていて星は見えるが、月の姿は見えない坂道を友希那と歩いていた。
そして、友希那を公園に誘って、大きな木の下で告白をした。
…綺麗に断られた。
『今は、音楽に集中したいの』
その言葉が、全てを物語っているだろう。
「あれから、一生懸命支えてくれてる。あなただけよ、メンバー探しにつきあってくれたの」
「だって、幼馴染が困ってるんだもん。それに、待ってるだけなんてやだよ。『僕は友希那の夢を全力でサポートする』…え？」
僕と友希那が同時に述べた言葉。

この言葉は、僕が友希那に向かって述べた言葉だ。
「…あの夜のことは、よく覚えてるわ。あんなの、忘れられるわけがない」
「……そうだね」
「『約束』だって、ちゃんと覚えてるから。心配しないで」
にっこり、とまではいかない。けど、その友希那の表情から楽しそうな感じがする。
「…ねぇ、翼」
「ん？どうかした？」
友希那は僕の前に立った。
僕達の頭上にはほんのりと灯る電灯があり、ふと、スポットライトを照らされたような気分になる。
スポットライトに照らされた友希那は、まるでステージの上に立つ女王のような美しさを放っていた。
「これからもサポートをお願いできるかしら」
女王（ゆきな）は、僕に手を差し出してステージに誘う。
そんな女王（ゆきな）の呼びかけに、僕は女王（ゆきな）の手をとって、こたえる。
「もちろん！喜んで！」
僕らは、手を繋いで家へと帰る。

「あいつ、やっぱり女と帰ってやがる…」
それを、龍斗（面倒な奴）に見られたことを、この時の翼はまだ知る由もない